

「無能」から見た『紅樓夢』の構造 —— 憶語体文学を手がかりとして ——

森 中美 樹

はじめに

十八世紀中葉、清の乾隆中期に曹雪芹が著した『紅樓夢』は、乾隆五十六年（一七九一）に程偉元と高鶚によって刊行されるまでの数十年間、抄本の形で伝わっていた。当初は作者とその関係者（近親者や友人）ら、曹家の内部事情を知る、ごく狭い身内の中だけで回覧されていた『紅樓夢』は、作者の死後、次第に外部に流出し始め、ついにはその転写本が、曹家とは無縁の者たちの間で高値で取引されるようになっていった。こうした状況下で程偉元らが刊行した『紅樓夢』全百二十回本は、瞬く間に世に広まった。

『紅樓夢』は、大貴族賈家の栄枯盛衰を背景に、賈宝玉とその従妹林黛玉の悲恋を描いた章回小説である。清の夢覚主人はこれを、「言語動作之間、飲食起居之事」を描いた作品だと述べ、我が国の幸田露伴は、「飯を食うばかりの小説」と言った¹⁾。しかし、この「飯を食うばかりの小説」は、刊行されるや否や爆発的な人気を博した。郝懿行によれば、乾嘉の間、都には家々に『紅樓夢』があったという。愛読のあまり、精神に異常をきたした者、果ては命を落と

す者まで現れ、結末に納得できない者たちは、みずから筆を執って大団円に改変した続書を刊行した。現在知られる三十二種の続書のうち、もつとも早い逍遙子『後紅樓夢』は、『紅樓夢』刊行後わずか五年で上梓されている。その一方で、これを誨淫の書と見なし、徹底的に否定した文康『兒女英雄伝』のような小説も現れた。つまり、『紅樓夢』という小説は、褒貶いずれの立場であれ、張競氏の言葉を借りるなら、「読者を「本気」にさせた」のである。いったい何が、読者をかくも「本気」にさせたのか。本稿では、その理由を考えたい。

そもそも『紅樓夢』は、他の長編小説、たとえば四大奇書などとは異なり、完全に作者の虚構から生まれた小説である。史実や先行作品に基づかない『紅樓夢』は、読者にとっては全く未知の小説だったと言えよう。しかもそれは、『三国志演義』や『水滸伝』のような、英雄や豪傑が繰り広げる壮大な物語でもなければ、『金瓶梅』のようなエネルギー溢る世界を描いたものでもなく、「天下無能第一」（第三回）である主人公と、「幾個異様女子」（何人かの風変わりな女性たち―第一回）ばかりが出てくる、家庭の瑣事を描いた

小説なのである。にもかかわらず、読者がこれにただちに反応し、受け入れたということは、作者の力量もさることながら、読者の側に、こうした作品を理解し、享受できる素地・素養があらかじめ備わっていたからだと考えられる。日下翠氏はこれを、作者と読者のキヤッチボールにたとえられたが、円滑なキヤッチボールを可能とするためには、共通のルール、すなわち、作者と読者の間に共通の文化背景が存在することも必要であろう。この三つがうまく重なったとき、爆発的なヒットというものが生まれるのではなからうか。

そこで本稿では、作者が主人公に付与した「無能」という設定が、当時盛行していた憶語体文学と関係していることを述べ、なぜ『紅樓夢』が読者をかくも「本気」にさせたのか、その理由について卑見を示したい。

なお、本稿でいう読者とは、主に刊本以降の読者、すなわち、小説の内部事情を知らない、曹家とは無関係の読者を指し、その下限は清末までとする。よって、初期の読者である、脂硯齋ら近親者の言説や、作者論が活発化する胡適「紅樓夢考証」（一九二一）以降の読者については扱わない。また、作者という場合、これら清代の読者が、『紅樓夢』の成書過程（前八十回は曹雪芹の原作、後四十回は後人の続作または補作）を問題視していないことに鑑み、原作者と続作者（ないしは補作者）の区別をせず、一律に作者として扱っていることを付記しておく。

一、「無能」な主人公

『紅樓夢』の主人公賈宝玉を端的に表しているのが、第三回の「西

江月」二首である（傍線、引用者、以下同）。

無故尋愁覓恨、有時似傻如狂。縱然生得好皮囊、腹内原來草莽。潦倒不通庶務、愚頑怕讀文章。行為偏僻性乖張、那管世人誹謗。わけもないのに愁えてみたり、時には馬鹿か痴れ者か。たとえ見かけは立派でも、中身はなんとすつからかん。時代遅れで世事には疎く、愚味な上に勉強嫌い。偏屈者の意地つ張り、世間のそしりを受け流す。「其一」

富貴不知榮業、貧窮難耐淒涼。可憐辜負好韶光、于国于家無望。天下無能第一、古今不肖無双。寄言纨绔与膏粱、莫效此兒形狀。

富貴の時は好き勝手、貧乏暮らしに恨み節。あたら良き日を無駄にして、国にも家にも役立たず。天下第一の無能もの、古今無双の不肖もの。世の公達にも申す、この子を手本にするな
かれ。「其二」（第三回）

「天下無能第一」である賈宝玉は、読書人を「緑蠹」（俸禄泥棒）と呼び（第十九回）、自身を含めた男性を「濁物」（俗物）「渣滓」（残りかす）「濁沫」（濁ったあぶく）「可有可無」（いてもいなくてもいい）と痛罵する（第二十回）。その一方、「清淨女兒」（第五回）である未婚の少女のことは、「天地靈淑之氣、只鍾於女子」（山川日月の精気が集まったもの）と賛美するのである（第二十回）。

こうした人物設定から、従来、『紅樓夢』の主人公については、さまざまな意見が提出されてきた。作者の分身として過去を懺悔した自伝説（俞平伯氏）、反封建思想の体現者と見る説（李希凡・藍翎氏）、また、近年では性同一障碍者と見る説（合山究氏）など枚挙に遑がないが、いずれの説も、「なぜ『紅樓夢』が読者をかくも「本気」にさせたのか」という疑問に対する答えにはなり得ていな

い憾みが残る。ほとんど定論を見ないこの議論の中で、唯一共通しているのが、それらがいずれも作中の人物である賈宝玉を我々と同一視した、いわば生身の人間と見る視点から論じられたものである点である。しかしながら、先の例からもわかるように、生身の人間に比定した議論は、容易に「仁者は仁を見、智者は智を見る」といった状況に陥ってしまうのである。

こうした視点から立論された議論の限界を指摘したのが、小南一郎氏である。小南氏は登場人物の分析に際しては、他の登場人物たちと結ぶ関係性によつて物語展開を分担している、「小説内部における『生態学的機能』」と、生身の人間のように描かれている「文学的な人物像」を分離する必要があることを指摘して、次のような見解を示された。

近世の長編小説（四大奇書および『紅樓夢』―引用者注）がそろつて、『影の薄い』人物を主人公に設定していることについては、^二偶然にそうなのではなく、^一そうでなければならぬ必然性があったからだと考えられる。そうしてその必然性は、文学的な内容が要請したのではなく、主人公が『強い』人物であるとき、それら近世の長編小説が物語りとして展開するための支障となつたからだと推定される。……なぜ英雄たちに心服されるのか良くわからないような人物（宋江を指す―引用者注）であればこそ、多くの英雄たちの活躍をその周囲に展開させることができたのである。……それゆえ、逆に生半可に主人公が正面に出て来ている作品は、必ずしもできが良くないのである。^三
小南氏の言う「『影の薄い』人物」は、「無能」と置き換えることが可能であろう。であれば、『紅樓夢』の主人公が「無能」なの

は、「文学的な内容が要請した」人物形象などではなく、「小説内部における『生態学的機能』」に起因したものだと思ふべき事柄なのである。では、作者が賈宝玉に課した『生態学的機能』とは何なのか。

先に挙げた「西江月」をもう一度見ると、二首目第四句に「于国于家無望」とあることから、賈宝玉の「無能」は、天下国家に役立つ人物の対極に位置していることがわかる。より具体的に言えば、彼は学問をしないのである（二首目第四句「怕読文章」）。ならば何をしているのかというと、姉妹や侍女たちを相手に、毎日ただ遊び暮らしているのである。

第二十三回、姉妹たちと邸内の大観園で生活する賈宝玉の様子を、作者は次のように描く。

且説宝玉自進園來、心滿意足、再無別項可生貪求之心、每日只和姊妹丫鬟們一處、或讀書、或写字、……拆字猜枚、無所不至、倒也十分快意。

さて宝玉は園に入つてからは、心から満ち足りた思いで、ほかに欲しいものなど何もなく、毎日ただ姉妹や侍女たちと一緒に、本を読んだり、字を書いたり、……文字遊びやら当て物やら、手当たり次第のやりたい放題、それで十分に満足しているのです。（第二十三回）

そして、彼女たちとの間に、以下のような場面を描いてゆく。

① 自分がずぶ濡れなのに、相手が濡れていないかと氣遣う。

（第三十一回）

② 自分が火傷をしたのに、相手が火傷していないかと氣遣う。

（第三十五回）

③ 夫婦喧嘩のどばつちりて打擲された侍女に落涙する。(第四十四回)

④ 盗みを働いた侍女や(第五十二・六十一回)、園内の決まりを破った女役者を庇う。(第五十八回)

⑤ かどわかされ、自分の名前も素性もわからぬ女性の境遇に嘆息する。(第六十一回)

⑥ 讒言に遭って病死した侍女のために「芙蓉女兒詠」を作る。(第七十八回)

⑦ 嫁ぎ先でいびられている従姉に落涙する。(第八十一回) 女性たちに気を遣い(①②)、同情したり(③⑤⑦)、悲憤したり(⑥)、時にはみずから進んで泥をかぶる(④) 賈宝玉の姿を、

作者は「無事忙」(下らぬことにかまける人―第三十七回)と評し、前出の「西江月」では「無故尋愁覓恨、有時似傻如狂」(一首目第一・二句)と表現した。そして、彼女たちと過ごす賈宝玉の心情を、次のように描く。

我能够和姊妹們過一日、是一日、死了就完了、什麼後事不後事。

ぼくは姉妹たちと一日を過ごせば、それこそが一日というものの、死んでしまえば終わりなんですから、先の事なんて。(第七十一回)

男性である賈宝玉が、かくも親密に女性たちと生活できたのは、作者が特例(祖母である賈母の寵愛や、貴妃となった姉元妃、すなわち賈元春の意向)を講じ、彼を常に閨中に置いたからである。

他与別人不同、自幼因老太太疼愛、原係同姊妹們一處嬌養慣的。あの子はほかの者とは違い、幼いときからお祖母さまが大変可愛がられたので、姉妹たちと一緒に甘やかされて育ったのです。

(第三回)

(元妃) 命宝釵等在園中居住、不可封錮、命宝玉也隨進去讀書。

(元妃は) 宝釵らを園内に住まわせるよう、封鎖はならぬと命じ、宝玉も一緒に入れて勉強させよと命じます。(第二十三回)

学問嫌いで、男性を拒絶し、女性たちと一緒にいることに無上の喜びを感じる人物を造形し、彼を常に閨中に置いたことにより、作者は主人公が女性たちと交流する時間を十分に確保した。その結果、先に挙げたような些細な場面に至るまで、細大漏らさず描くことができたのである。つまり、「無能」な主人公は、女性たちとの関係において、共に過ごす日常生活の内部から、彼女たちの生態や感情を読者に伝える機能を果たしているのである。なぜ、このような主人公を必要としたのか、その理由は、第一回に見える作者の執筆動機との関係から明らかとなる。

二、作者の執筆動機―追憶と批判

『紅樓夢』の執筆動機について、作者は往年の仲の良かった女性たちのことを追憶し、彼女たちの真実の姿を世に知らしめるために書いたのだと述べる。

作者自云、……忽念及当日所有之子女(「子女」、他本皆作「女子」―引用者注)、一一細考較去、覺其行止見識皆出我之上。

……然閨閣中歷歷有人。……雖我不學無文、又何妨用假語村言、敷演出来、亦可使閨閣昭伝。

作者みずから言う、……ふと昔日一緒にいた女性たちのことを思い出し、一人一人を仔細に比べてみると、その立ち居振る舞

いや見識はみな遙かに自分より勝っていた。……閨中にも立派な人がいるのである。……自分は無学で文才もないが、作り話でもつて、書き綴り、閨閣の女性たちの伝を世に明らかにしてみよう。(第一回)

「仮語村言」をもつて閨閣の女性たちの伝を書く理由について、
作者は才子佳人小説を意識して、次のように言う。

至於才子佳人等書、則又開口文君、滿篇子建、千部一腔、千人一面、且終不能涉淫濫。……更可厭者、「之乎者也」、非理即文、大不近情、自相矛盾。竟不如我半世親見親聞的這幾個女子、雖不敢說強似前代書中所有之人、但觀其事跡原委、亦可消愁破悶。……其間離合悲歡、興衰際遇、俱是按迹循踪、不敢稍加穿鑿、至失其真。

才子佳人といった本にいたっては、口を開けば卓文君(のような佳人)、全編これ曹子建(のような才子)、千篇一律で、似たり寄ったり、しかも結局は色事に及ばないわけにはいかなくなるのです。……更にうんざりなのは、「乎」だの「也」だのといった文体で、演説調でなければ美文調(といった空虚な文体)、そのくせ中身は情理にかけ離れている上に、互いに矛盾だらけです。私が半生に親交を結んだこの何人かの女性たちは、前代の書物に書かれた女性たちに勝るとは言いませんが、その行跡の一部始終は、憂さ晴らしや退屈しのぎにはなりません。……彼女たちとの間で繰り広げられた離合悲歡や、興亡際の物語は、すべてありのままを記すように努め、いささかたりとも勝手な穿鑿を加えて、真実の姿を失わせるようなことはしませんでした。(第一回)

新しい才子佳人小説を書くにあたり、作者は従来の、出会えばすぐにくつくとくといった描写を排除した。そのことは、第五十四回、登場人物(賈母)の口を借りて述べられた以下の批判からもわかる。

這些書就是一套子、……這小姐必是通文知礼、……竟是「絕代佳人」、只見了一個清俊男人、……想起他的終身大事來、父母也忘了、……鬼不成鬼……做出這樣事來、也算不得是佳人了。

こうした本はみな同じ手なんだよ、……このお嬢様というのが必ず学問に通じていて礼儀に明るく、……つまりは「絶世の佳人」なのだけれど、かつこい男を一目見るや、……自分の人生の大事(結婚)を思い出して、父母も忘れ、……幽霊を幽霊とも思わず、……こんなこと(密通)をしでかすんだもの、何が佳人なものですか。(第五十四回)

したがって、『紅樓夢』では賈宝玉と林黛玉の間に性愛描写はない。その代わり、相手を思慕する心の変化を、時間の流れに従い、ごく自然な形で丹念に描いてゆく。

(宝玉)如今与黛玉同处賈母房中坐臥、故略比別個姊妹熟慣些。(宝玉は)今では黛玉と賈母の部屋で一緒に寝起きしているの
で、他の姉妹に比べると幾分親しみを感じています。(第五回)
最初は親しみを感ずる程度の感情が、「幼い時から黛玉とは鬢の毛が触れあう距離で過ごした」(從幼時和黛玉耳鬢斯磨)ことにより、次第に「気持ちちがびつたりして」(心情相對)、相手には常に自分の気持ちを受け入れて欲しいと願う自然な欲求へと深化する
(第二十九回)。

宝玉の心内想的は、「別人不知我的心、還可恕。難道你就不想我的心裡眼裡只有你。……只要你隨意、我便立刻因你死了也情

願」。

宝玉の内心に思うよう、「ほかの人がぼくの気持ちをわからな
いのは、まだ許せる。まさかあなたまでがぼくの心中にも眼中
にもあなたしかいないことをわかってくれないなんて。……あ
なたさえ満足してくれるなら、ぼくはあなたのために今すぐ死
んでも本望だというのに」。(第二十九回)

一方、林黛玉もまた、賈宝玉のことを知己だと思っている。つま
り、二人は相思相愛の間柄なのだが、病弱で孤児の林黛玉は、将来
の不安から逃れられない。

「……我雖為知己、但恐不能久待。你縱為我知己、奈我薄命何」。
想到此間、不禁滾下淚來。

「……私が知己だといっても、あまり長くは保たないと思う。
あなたがいくら私の知己だといっても、私の薄命はどうしよう
もない」。ここまで考えると、こらえきれず涙がはらはらとこ
ぼれます。(第三十二回)

「想到此間」とあるように、作者は林黛玉の不安を直接賈宝玉に
語らせてはいない。その不安は第二十七回の「葬花詞」を、第二十
八回、賈宝玉が偶然聞きつけることにより、間接的に伝えられるの
である。

爾今死去儂收葬 爾今死に去り儂收葬す

未卜儂身何日喪 未だ儂が身の何れの日喪ぶかを卜さず

儂今葬花人笑痴 儂今花を葬り人痴なりと笑ふ

他年葬儂知是誰 他年儂を葬るは是れ誰なるかを知らん(第
二十七回)

こうした林黛玉の不安を、賈宝玉は何度も打ち消そうと努める。

我心裡的事也難对你説、日後自然明白。除了老太太、老爺、太
太這三個人、第四個就是妹妹了。

ぼくの心の中の話はあなたには言いくいのだけれど、いつ
の日か自然におわかりになるでしょう。お祖母さま、父上、母
上、このお三方を除けば、四番目はあなたなのですよ。(第二
十八回)

(宝玉) 方説道、「你放心。……好妹妹、我的這心事、從來也
不敢説、今日我大胆説出來、死也甘心。……睡裡夢裡也忘不了
你」。

(宝玉は) やがて言います、「安心して。……ねえ、ぼくのこ
の気持ちは、これまで言えなかったけれど、今日思い切って言
えたら、死んでも文句はないのです。……眠っていても夢の中
でもあなたが忘れられないのです」。(第三十二回)

「……只是我想妹妹素日本來多病、凡事各自寬解、不可過作
無益之悲。若作踐壞了身子、使我」説到這裡、覺得以下的話有
些難説、連忙嚥住。只因他雖説和黛玉一处长大、情投意合、又
願同生死、……。

「……ぼくはあなたは日頃から病気がちだから、何事も心を広
く持つて、無用の悲しみにくれるのはだめだと思うんです。も
し体を壊してしまつたら、ぼくとしては……」ここまで言うど、
あとが言い出しにくくなり、あわてて黙り込んでしまいます。
彼としては黛玉とは一緒に大きくなり、意気投合しているので、
生死を共にすることを願っているのですが、……。(第六十四

回)

「同生死」を願うのは林黛玉も同じであった。第五十七回、林黛玉が蘇州の実家に帰るとのデマを真に受けた賈宝玉が、にわかには危篤状態に陥ると、それを知った林黛玉もまた、腹心の侍女に、「いっそ縄を持ってきて私をくびり殺して」（你竟拿繩子來勒死我）と言って泣くのである。

以上の例からもわかるように、従来の才子佳人小説を否定した作者は、賈宝玉と林黛玉の姿を、決して「且終不能不涉淫濫」（第一回）にはしなかった。作者は、二人を「痴病」の持ち主だと設定し（第二十八回）、ただ一心に互いを知己と思ひ定め、相手を恋ひ慕う情愛の細やかさ、そして時には死をもいとわぬ感情の昂ぶりを、時間軸に沿って丁寧に描いたのである。二人の恋はプラトニックに終始し、婚姻に到ることなく、第九十七回、林黛玉の夭折によって終わる。

この、互いに知己と思ひ、相手を命がけて恋ひ慕う姿が、当時の読者の共感を誘った。たとえば、いち早く『紅樓夢』を戯曲化した仲振奎は、その著『紅樓夢傳奇』の自序（嘉慶三年識）で次のように言う。

哀宝玉之痴心、傷黛玉、……而喜其書之纏綿悱惻。

宝玉の痴心を哀しみ、黛玉を傷む、……而して其の書の纏綿悱惻なるを喜ぶ。

二知道人（蔡家琬）と涂瀛もまた、それぞれ次のように評した。

宝玉之痴情於黛玉、刻刻求黛玉知其痴情、是其痴到極處、是其情到極處。宝玉、人皆笑其痴、吾獨愛其專一。

宝玉の痴情は黛玉に於て、刻刻として黛玉に其の痴情を知るを

求む、是に其の痴は極處に到り、是に其の情は極處に到る。宝玉、人皆な其の痴を笑ふ、吾獨り其の專一なるを愛す。

宝玉之情、人情也、為天地古今男女共有之情、為天地古今男女所不能尽之情。天地古今男女所不能尽之情、而適宝玉為林黛玉心中目中、意中念中、談笑中、哭泣中、幽思夢魂中、生生死死中悱惻纏綿固結莫解之情、此為天地古今男女之至情。

宝玉の情、人の情なり、天地古今男女共に有るの情を為し、天地古今男女尽くすこと能はざる所の情を為す。天地古今男女尽くすこと能はざる所の情、適だ宝玉のみ林黛玉の心中目中、意中念中、談笑の中、哭泣の中、幽思夢魂の中、生生死死の中に悱惻纏綿として固く結び解くこと莫きの情を為すは、此れ天地古今男女の至情を為す。

作者が従来の才子佳人小説を否定して、往年の仲の良かった女性たちを追憶し、少年少女の細やかな心情描写を本筋とする小説を描いたこと、そして、これに読者がただちに反応し、受け入れた背景には、作者と読者が共有していた同時代感覚というものがあった。それが、当時盛行していた憶語体文学の存在である。

三、憶語体文学と『紅樓夢』

憶語体文学は、明の遺民である冒襄の『影梅庵憶語』に始まるとされる。これは、冒襄が今は亡き愛妾董小宛を追憶したもので、冒頭で次のように記している。

愛生于暱、暱則無所不飾。綠飾著愛、天下鮮有真可愛者矣。：

…近好事家、復仮篆声詩、侈譚奇合。遂使西施、夷光、文君、洪度、人人閣中有之。此亦閩秀之奇冤、而噉名之惡習已。亡妾董氏、…：伝其慧心隱行、聞者歎者、莫不謂文人義士難与争儔也。余業為哀辭数千言哭之、…：不能自伝其愛。何有於飾。…：豈至今復效輕薄子漫譜情艷、以欺地下。

愛は暉より生じ、暉めば則ち飾らざる所なし。飾りに縁りて愛を著さば、天下に真に愛すべき者有ること鮮し。…：近ごろの好事家、復た篆声の詩を仮りて、侈いに奇合を譚ず。遂に西施、夷光、文君、洪度をして、人人の閣中に之を有らしむ。此れ亦た閩秀の奇冤にして、名を噉るの惡習なるのみ。亡妾董氏、…：其の慧心隱行を伝ふれば、聞く者歎じ、文人義士も与に儔を争ふこと難しと謂はざるもの莫きなり。余の業哀辭数千言を為して之を哭すも、…：自ら其の愛を伝ふること能はず。何ぞ飾ること有らんや。…：豈に今に至りて復た輕薄子の漫譜情艷に效ひて、以て地下を欺かんや。

大木康氏は、これと『紅樓夢』の執筆動機および執筆態度が共通していることを指摘されている。その共通点とは、「すぐれた女性を記録しておかなければならないという動機」と「通俗的才子佳人物語批判の言説」、そして「何らの虚飾なしに記したものと」する執筆態度である。

一方、木下鉄矢氏は洪亮吉・錢大昕・王念孫・段玉裁ら「『考証学』の代表的な学者たちにもこの種の文章を見出すことが出来る」ことを示され、憶語体文学が「ある種の「時代的様相」を呈している」と指摘された。つまり、『紅樓夢』が描かれた前後、すなわち、十七世半ばから十九世紀初めにかけて、「女性の想い出とその人と

の間の細やかな感情生活、そこで語られた忘れ得ぬ言葉の想い出を「纏綿」と語る文章」が盛行していたのである。

嘉慶年間に書かれた沈復『浮生六記』は、『影梅庵憶語』と並ぶ憶語体文学の傑作だが、その冒頭にも「真実を書いたものだ」との言説が見られる。

東坡云、「事如春夢了無痕」、苟不記之筆墨、未免有辜彼蒼之厚。…：所愧少年失学、稍識之無、不過記其実情実事而已。

東坡云ふ、「事は春夢の如く了りて痕無し」と。苟も之を筆墨に記さざるは、未だ彼の蒼の厚きに辜くこと有るを免れず。…：愧づる所は少年学を失ひ、稍だ之を識る無し、其の实情実事を記すに過ぎざるのみ。

実事と虚事の違いこそあれ、『紅樓夢』は憶語体文学と同じ特徴を備えていた。何より共通しているのは、先に挙げたように、作者が過去の女性たちを追憶し、その「真実を書いたものだ」（不敢稍加穿鑿、至失其真）と宣言している点である。

実際、賈宝玉と林黛玉の情愛描写の細やかさには、小説というフィクションを超えて、読者に一定の真実を認めさせる力が備わっていた。たとえば諸聯は次のように言う。

若云空中楼阁、吾不信也、即云為人記事、吾亦不信也。若し空中楼阁と云はば、吾信ぜざるなり、即ち人の為に事を記すと云はば、吾亦た信ぜざるなり。

夢覚主人はその筆力が優れていることを、以下のように述べる。言語動作の間、飲食起居之事、竟是庭園形表、語謂因人、…：善写性骨也。

言語動作の間、飲食起居の事、竟に是れ庭園は表に形れ、語

是人に因りて謂ひ、……善く性骨を写すなり。^(二四)

さらに謝鴻申は、真に迫っているから、自分はこれを愛読するのだと述べる。

『紅樓夢』事跡本来平淡無奇、……乃偏能細筋入骨、写照如生、筆力心思、無出其右。……令人愈看愈愛者、『紅樓夢』是也。

『紅樓夢』の事跡本来平淡にして奇無し、……乃ち偏に能く細筋入骨し、写照すること生くるが如く、筆力心思、其の右に出づるものなし。……人をして愈よ看れば愈よ愛でしむ者は、『紅樓夢』是れなり。^(二五)

描写が真に迫っていたからこそ、読者は『紅樓夢』に描かれた心情を真実だと信じていることができ、また、愛読することができたのである。その結果、本稿の冒頭で触れたように、感動のあまり虚実の境を無くし、これに感溺して精神に異常をきたしたり、落命する者まで現れたのである。心理描写が真に迫っていること、これが『紅樓夢』が刊行後ただちに受け入れられた大きな要因なのである。

四、女主人公の死

以上、『紅樓夢』がその執筆動機や態度、内容において、憶語体文学と重なることを述べた。しかし、『紅樓夢』が『影梅庵憶語』や『浮生六記』のような憶語体文学と決定的に違うのは、これがやはり虚構の物語だという点である。憶語体文学のように実事を指向した部分と、「仮語村言」を用いた小説としての虚事のバランスを、作者はどのようにとつたのであろうか。その鍵が、第五回で显示された『紅樓夢』の枠組みにあると筆者は考えている。

そもそも、物語の早い段階で話の結末を明らかにするのは、長編小説の書き方としては常道であった。歴史に取材した『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』の場合は、周知の史実がすなわち結末であり、創作である『金瓶梅』であっても、第二十九回という早い回で主要人物の結末が暗示される。『紅樓夢』の作者は、従来の小説の内容や執筆態度は否定したが、物語の作り方については否定していない。『紅樓夢』がその結末を、第五回という、かなり早い段階で示しているのは、従来の長編小説の作法を踏襲したものであると同時に、史実や粉本に基づかない、未知の物語を読む読者への配慮だとも考えられよう。

さて、第五回に呈示された『紅樓夢』の枠組みは、この物語が悲劇で終わることを暗示したものだ。作者は「賈元春」や「終身悞」「枉凝眉」「恨無常」などと命名した。「紅樓夢十二曲」などの音曲で、読者に対し、登場人物がいずれも薄命であることを予見させる。たとえば、賈宝玉が林黛玉（木石縁）ではなく、従姉薛宝釵（金玉縁）と不幸な結婚をすることを暗示したのが、次に挙げる「終身悞」である。

「終身悞」都道金玉良縁、俺只念木石前盟。空对着、山中高士晶莹雪、終不忘、世外仙姝寂寞林。嘆人間美中不足今方信。縱然是齊眉舉案、到底意難平。（第五回）

「終身悞」人みな金玉の良縁と言えど、我はただ木石の前縁を思う。虚しく対す、山中の高士のごとき輝く雪に、忘れ得ず、世外の仙女のごとき寂しき林を。嘆かわしや俗界は美中に不足有りと今こそ知るとは。たとえば夫婦となつたとて、この心は晴れがたし。（第五回）

『紅樓夢』の悲劇性については、清末の王国維が「紅樓夢評論」で「徹頭徹尾之悲劇也」と述べたことが知られているが、その指摘は、早くは嘉慶年間に、二知道人が次のように述べている。

小説家之結構、大抵由悲而歎、由離而合、引人入勝。『紅樓夢』則由歎而悲也、由合而離也。非凶壁壘一新、正欲引人過夢覺閑耳。

小説家の結構は、大抵悲より歎、離より合にして、人を引き寄せ勝に入らしむ。『紅樓夢』は則ち歎より悲なり、合より離なり。壁壘の一新を図るに非ず、正に人を引き寄せて夢覺の閑を過ぎせしめんと欲するのみ。

『紅樓夢』がそれまでの小説や戯曲の常套であった大団円ではなく、悲劇で終わる点については、しばしば『紅樓夢』の獨創性として高く評価され、また、その異質さが議論の対象となってきた。しかし、もしこれを憶語体文学から派生した、「憶語体小説」とみるならば、『紅樓夢』が悲劇であるのはむしろ当然だといえよう。憶語体文学の出発点は、愛する者の死であり、その結末もまた、愛する者の死だからである。死者を追憶する憶語体文学は、いうならばその構造上、死を枠組みとして持っていることになる。そして、死こそが憶語体文学における、感動を呼び起こす装置となっているのである。だから、もし、その枠組みを逸脱し、たとえば死者が生き返るなどということになれば、憶語体文学は追憶のよりどころを失い、崩壊してしまうだろう。それは、『紅樓夢』の場合も同じであった。

『紅樓夢』の死は、小説という虚構の世界に生きる者の死であった。そのため、秦子忱のように「賈宝玉と林黛玉の結末に納得のい

かない」(而於宝、黛之情縁終不能釈然於懷) 読者たちは、何の遠慮もなくその枠組みを変え、死者を復活させて大団円に書き換えた。『紅樓復夢』の作者小和山樵は言う。

或問曰、「夢可復乎」。余応曰「可」。
或問ひて曰く、「夢は復すべきか」と。余応へて曰く、「可なり」と。

続書の改変方法について、井波陵一氏は次のように総括された。林黛玉と賈宝玉が結ばれない以上、……夢はまだ見続けることができるし、またそうしなければならぬ。……作者の目的は林黛玉と賈宝玉をめたく結ばせることにある。(中略)したがって原作では物語の枠組みを形作るに過ぎなかつた天上世界(さらには地上世界)を積極的に活用して、原作の結末を超自然的に改めることになる。

続書の作者はみな、死者の復活は可能だと考えて改変した。しかし、その結果はどうであつたのか。清末から民国期に活躍した報癖(陶佑曾)は、これらの続書を次のように批判した。

試調査其内容、……事跡荒唐、陳陳相因、毫無特色、較之曹著、不啻天淵、似俚似文、殊乖体例。

試しにその内容を調べると、……話の筋は滅茶苦茶で、どれもこれもみな一緒、いささかの独自性もなく、これを曹雪芹の文と比べると、雲泥の差で、俗文のようでもあり雅文のようでもあり、まるで文章の体をなしていないのである。

結末を悲劇から大団円へ改める過程で、女主人公の死という追憶のよりどころを失つた続書は、いずれも何の感興も生み出さない駄作に陥ってしまった。つまり、『紅樓夢』の枠組みは変えられない

ったのである。それは、女主人公の死が、昔日の閨閣の女性を追憶したとする『紅樓夢』の根幹に位置しているからである。

『紅樓夢』第五回に示された枠組みは、夢の中で見聞きした凶冊や音曲といった美的かつ文学的なオブラートに包まれているが、その実体は、「愛する者の死」という絶対的な悲劇であった。この悲劇を読者に「真実を描いたものである」と感得させたのが、「無能」な主人公なのである。

五、「無能」と読者

虚構の物語の人物である林黛玉の死に対し、読者が熱狂的に反応したのは、そこに至るまでに語られた、賈宝玉と林黛玉の情愛描写の中に、読者がそれぞれの「真」を見出し出していたからである。その「真」は、「無能」と設定された賈宝玉が、閨中から読者に伝えてきたものであった。彼がもつとも読者に語った相手が、林黛玉である。二人の情愛のさまは、読者に「真」であると受け止められた。第三節で挙げた謝鴻申は、「真」に迫っているから、愛読するのだと述べている（乃偏能細筋入骨、写照如生、……令人愈看愈愛者、『紅樓夢』是也）。

第五回で暗示されていた女主人公の死が、第九十八回、もつとも語るべきその人をすでに亡くした「無能」な主人公から語られるとき、読者はその姿の中に、死者に対し、生者は追憶するしかないという、普遍的な真実である「無能」を重ね、賈宝玉と林黛玉の情愛の終焉を我が事として、これを悼んだのである。この時、読者は虚実の境を超え、『紅樓夢』という架空の物語に「本気」になったのである。

ある。

その一方、『紅樓夢』を誨淫の書と見なし、否定する読者もいた。文康は、主人公安龍媒を「有能」と設定した『兒女英雄伝』を著し、「無能」な賈宝玉を批判した。

……比起那『紅樓夢』裡的賈宝玉、雖說一樣的兩個翩翩公子、論閱閱助華、……賈宝玉是個累代国公的文孫、天之所賦、自然該於賈宝玉独厚纔是。何以賈宝玉那番鄉試那等難堪、後來直弄到死別生離。安龍媒這番鄉試這等有興、從此就弄得功名就。

……『紅樓夢』の賈宝玉と比べてみると、同じような二人の風雅な若君とはいえ、家格や勲功からいえば、……賈宝玉は累代の重臣の令孫、天の与えたところは、無論賈宝玉のほうがずっと厚いと言えましよう。なのになぜ賈宝玉はあも試験を嫌がり、のちには（林黛玉と）死別し（薛宝釵と）生き別れるに至ったのでしょうか。安龍媒は今回の試験にこうも前向きですから、これより功成り名を挙げられるのです。（第三十四回）

文康は、賈宝玉が学問をせず、毎日ただ女性たちと遊んでいたことを批判する。だが、この「無能」こそが、新しい才子佳人小説を描こうとした『紅樓夢』の作者の真骨頂だったことは、縷説したとおりである。旧来の才子佳人小説の「才子」は畢竟、「有能」な主人公であり、「有能」な主人公を擁した『兒女英雄伝』もまた、その意味で旧套に陥っているのである。情愛描写が『紅樓夢』に遙かに及んでいないことは、文康自身も「腐爛噴飯的」と認めているとおりである（第三十四回）。

前節で扱った『紅樓夢』の続書もまた、主人公を「無能」から「有能」に変えている。この書き換えにより、物語を大団円に収めたの

だが、「無能」な主人公が消えたことにより、その情愛描写は単調になり、読者に訴求する力のない作品に変質してしまっている。

文康のように、賈宝玉を否定する者は『紅樓夢』を否定したが、『紅樓夢』の愛読者たちは、一様に賈宝玉を受け入れ、これに共感したり、理解を示している。先に挙げた仲振奎や二知道人は以下のように述べていた。

哀宝玉之痴心、傷黛玉、……而喜其書纏綿悱惻。

宝玉之痴情於黛玉、刻刻求黛玉知其痴情、是其痴到極處、是其情到極處。宝玉、人皆笑其痴、吾獨愛其專^一。

過去の女性たちを追憶したとする『紅樓夢』において、女主人公の死は不可欠だった。同時に、彼女を追憶する主人公は、彼女の一笑、一言半句を読者に伝えるため、「無能」であることが必要だったのである。そして、多くの読者がこの「無能」な主人公を受け入れ、共感し得たことが、爆発的なヒットにつながった。それが『紅樓夢』という小説だったのである。

まとめ

『紅樓夢』が主人公を「無能」と設定した背景には、当時盛行していた憶語体文学の存在があった。『紅樓夢』では、追憶のよりどころとして、死を枠組みとして用い、「無能」な主人公と在りし日の女性たちとの交流という形をとって、彼女たちの声を読者に伝えたのである。「無能」な主人公は、常に女性たちのうちに在って、彼女たちの感情を表出させる役割を担っている。その結果、従来の

才子佳人小説とは異なり、心情描写のみで互いに惹かれ合う男女の真情を描ききることに成功したのである。

作者がこれを戯曲や随筆ではなく、小説にしたのは、追憶の対象とした女性が複数だったからであろう。憶語体文学の追憶の仕方は、対象を一人に絞り、作者と一対一の関係でなされているからである（複数の女性を追憶の対象とした余懷『板橋雜記』を見ても、その実体は銘々伝であり、やはり作者とは一対一の関係となっている）。

『紅樓夢』の場合、一連の物語の中で、下は侍女から上は后妃までを、「言語動作之間、飲食起居之事」のうちに描き分け、生き生きとよみがえらせたこと、そして、従来の才子佳人小説では語られることのなかった、未婚の男女の細やかな情愛を、密通や駆け落ちなどという極端な行動ではなく、足かけ十年にわたる瑣事の中で、感情の表出のみによって描き出したところに新しさがあり、読者はその感情の表出（すなわち作者の筆力）に真実を見いだし、かくも熱狂したのである。

『紅樓夢』における主人公の「無能」は、追憶を伝える装置として働いている。亡き人と過ごした過去の時間を回想したとする『紅樓夢』の時間構造は、遺された生者が死者を追憶するという普通の姿でもあり、その哀感情感が『紅樓夢』を『紅樓夢』たらしめているのである。

以上の考察から、『紅樓夢』は、憶語体文学から派生した「憶語体小説」に、「無能」な主人公を設定することによって成り立ち得たものであると筆者は考えるのである。

注

- (一) 程偉元『紅樓夢』(程甲本)「序」(乾隆五十六年)。
 (二) 夢覺主人『紅樓夢』(甲辰本)「序」(乾隆四十九年)。但し、引用は一粟編『紅樓夢卷』(中華書局、一九八〇年)巻二に拠る。以下、同書からの引用は、原書名注記のあと、()内に巻数のみ記す。
 (三) 松枝茂夫『紅樓夢』一(岩波文庫、一九四〇年)解説七頁に、松枝氏が露伴から直接聞いた言葉として、「紅樓夢はどうも飯を食ふところばかり多くて……」を載せる。
 (四) 郝懿行『曝書堂筆録』巻三「談諧」。
 (五) 鄒弢『三借廬筆談』巻四「小説之誤」および樂鈞『耳食録』二編巻八「痴女子」。
 (六) 「紅樓夢其顛託言情、隱欲弥蓋其怪力乱心者也。……世遂多信為談情、乃致悞人不少。『兒女英雄伝』巻首「兒女英雄伝評話原載序文」。本論中の引用も含め、「古本小説集成」(上海古籍出版社)所収光緒四年聚珍堂刊本に拠る。
 (七) 張競『恋の中国文明史』(ちくまライブラリー、一九九三年)二二八頁。
 (八) 引用は『程甲本紅樓夢』(北京図書館出版社、二〇〇一年)を使用。句読は、『紅樓夢校注本』(北京師範大学出版社、一九八七年)に拠ったが、引用の都合で改めた箇所がある。
 (九) 日下翠『金瓶梅』(中公新書、一九九六年)三九頁。
 (一〇) 俞平伯「作者底態度」及び『紅樓夢』底風格(『紅樓夢弁』中巻、上海亜東図書館、一九二三年)、李希凡・藍翎「關於『紅樓夢簡論』及其它」(『文史哲』、一九五四年九月号)、合山究『紅樓夢——性同一障礙者のユートピア小説』(汲古書院、二〇一〇年)。
 (一一) 小南一郎「李娃伝の構造」(『東方学學報』六二、一九九〇年)二七三—二七五頁。

(一二) 同前掲注(一)二七三頁。

(一三) 「仮語村言」を用いるより現実的な理由は、曹家が雍正帝の帝位継承問題に連座して失脚したためだとされるが、この点は作者の内部事情を知らない読者を対象とする本稿の論旨と直接関係しないので扱わない。

(一四) 「痴」をめぐる賈宝玉と林黛玉の情愛描写については、拙稿『紅樓夢』における情愛描写と桃花』(『中国中世文学研究』四七、二〇〇五年)を参照されたい。

(一五) 仲振奎『紅樓夢伝奇』「自序」(嘉慶四年刊)、(巻二)。

(一六) 二知道人『紅樓夢説夢』(嘉慶十七年刊)、(巻三)。

(一七) 涂瀛『紅樓夢論贊』「賈宝玉贊」(道光二十二年刊)、(巻三)。

(一八) 引用は『昭代叢書』別集所収道光二十九年吳江沈氏世楷堂刊本を使用。

(一九) 大木康『冒襄と「影梅庵憶語」の研究』(汲古書院、二〇一〇年)第二章第五章、四〇五—四〇六頁。なお、憶語体文学と『紅樓夢』に関しては、合山究「清朝の文芸—情念の世界への没入」(『季刊墨スペシヤル』一三、芸術新聞社、一九九二年)、張蕊青『紅樓夢』与『浮生六記』的靈犀共識(『紅樓夢學刊』一九九四年第四期)、李亞峰「試論『憶語文』問世的社会原因与文学背景」(『西華大学学报』哲学社会科学版、第二六卷第三期、二〇〇七年)などがあるが、いずれも女性を追忆する点が共通していることのみを取り上げる。その執筆動機や才子佳人小説との関係まで掘り下げて論じたものは、大木氏の論攷以外、管見の範囲に限って言えば見あたらない。

(二〇) 木下鉄矢『清朝考証学』とその時代』(中国学芸叢書二、創文社、一九九六年)二五五頁。

(二一) 同前掲注(一〇)。

(二二) 沈復『浮生六記』巻一「閨房記樂」。嘉慶十年代の作。引用は涂元濟

注釈『閨中憶語』(上海文芸出版社、二〇〇六年)所収本を使用。

(三) 諸聯『紅樓評夢』(道光元年刊)、(卷三)。

(四) 同前掲注(二)。

(五) 謝鴻申『東池草堂尺牘』卷一「答周同甫(第一函)」(光緒十七年刊)、(卷四)。

(六) 賈宝玉(太虚幻境の神瑛侍者)と林黛玉(絳珠草)の前世の姻縁を木石縁といい、転生の際、賈宝玉が玉(青埂峰下の石頭)を口に含んでいたことと、薛宝釵が金の鎖を持っていることの間設定された姻縁を金玉縁という。本来、神瑛侍者と青埂峰の石頭は無関係であったが、程偉元は神瑛の前身を石頭と改め、ともに賈宝玉の前身としている。

(七) 王国維「紅樓夢評論」(『教育叢書』第八—三期、光緒三十年、翌年『静庵文集』に所収)、(卷三)。

(八) 同前掲注(二六)。

(九) 秦子忱『続紅樓夢』「弁言」(嘉慶四年刊)、(卷二)。

(一〇) 小和山樵『紅樓復夢』「自序」(嘉慶四年刊)、(卷二)。

(一一) 井波陵一「夢の続き—『紅樓夢』続編の世界」(『興膳教授退官記念中国文学論集』、汲古書院、二〇〇〇年)六七—六七九頁。後に『紅樓夢と王国維』(朋友書店、二〇〇八年)所収。

(一二) 報癖「新石頭記」(『月月小説』第六期、光緒三十三年)、(卷六)。

※本稿中の引用は、書名・人名を含め、全て通行の字体に改めた。